

松村 宗悦(まつむら そうえつ)

柏崎の豪商奈良屋の生れ。安政二年十二月(一八五五)、六十五歳で没。通称則右衛門、若くして京都に出て、千宗室に茶儀を学び奥秘積翠庵と号す。を得る。文政十二年大阪で佐渡の税を司る役を務める時、郷里で二人の子供を亡し、京都に戻る。後、僧となり名を宗悦と改め柴野に住す。和歌を千種有功、茶をその子有文に説いた。柏崎の山田重秋や、市川行貞らを千種家の歌道に入門させている。大綱和尚と親交。著書に「玉井遺韻」があり、歌集日記等もある。

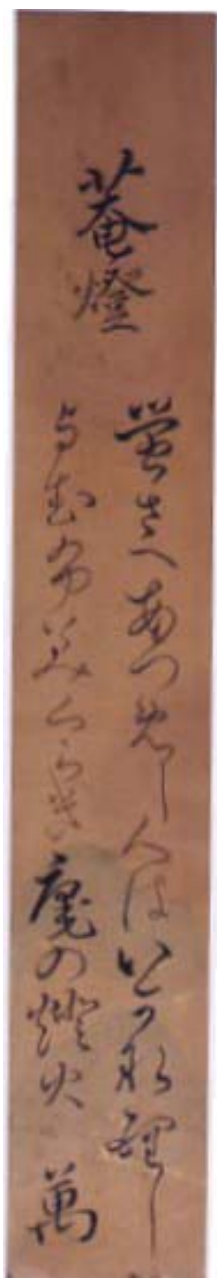
【参考文献】柏崎人物誌、越佐人名辞書



生田 萬(いくた よろず)

群馬県館林の人。享和元年(天保八年六月)一八〇一(一八三七)、三七歳で没。名は國秀、道満、字は求卿、号は東華・大中道人。師は平田篤胤。天保七年来柏し、桜園塾を開く。この頃柏崎は凶作続きで庶民の暮らし窮乏。柏崎代官所救護策講じず。天保八年六月一日、同十五人と謀り柏崎大久保陣屋を襲撃し失敗。海浜の砂上で自刃。妻鎬と二児も獄死。企ては失敗したが米価は急落し窮民は救われた。著書に「大中道人漫稿三卷」、「日本伝評論」、「古学二千年」等。

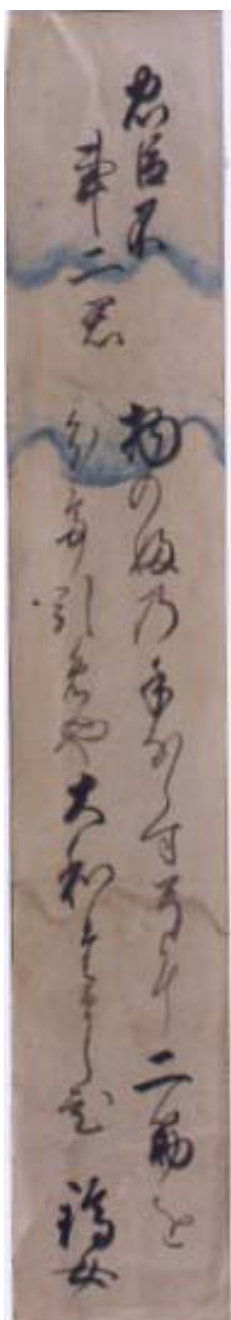
【参考文献】柏崎人物誌、柏崎のいしづみ、大人名辞典(平凡社)



生田 鎬女(いくた こうじょ)

生田萬の妻。文化元年(天保八年六月)一八〇四(一八三七)、三四歳で没。群馬、館林藩、香取庄右衛門政徳の娘。天保七年夫萬と共に柏崎に移住。長男・長女を幼にして亡くしているが、天保三年、同六年に二男児を生んでいる。天保八年六月一日「生田萬の乱」首謀者の妻鎬も、二児と共に入牢。牢内で二愛児を絞め殺し、自分も縊死した。図書館で所蔵する二枚の短冊には武士の妻の心意気が歌いあげられている。

【参考文献】柏崎の先人たち、柏崎のいしづみ、大人名辞典(平凡社)



藍沢 南城(あいざわ なんじょう)

三島郡片貝町に生まる。寛政四年七月(万延元年)一七九二(一八六〇)、六十九歳で没。名は祇、字を子敬、通称要輔、号鉢山・抜山・石城山・南城。北溟の長男。父病没後母の郷里刈羽郡南条村に移る。一五歳の頃江戸に出て松下一斎に折衷学を学ぶ。文政三年南条に私塾三餘堂創設。県内外から門人七二三名の記録有。詩を好み生涯に二〇〇〇編もの詩作。南城没後、養子朴斉、その子雲岬岫へ継がれる。著書に「南城三餘集」

【参考文献】大人名辞典(平凡社)、藍沢南城展解説目録



貞心尼(ていしんに)

長岡藩士奥村五兵衛の娘。寛政一〇年(明治五年)一七九八(一八七二)、七五歳で没。幼名マス。二三歳の時、番神の尼寺に入り剃髪し、心龍・眠龍の姉妹尼と生活。後柏崎洞雲寺の泰禅和尚に就き得度、柏崎釈迦堂の庵主となる。嘉永四年八木大火により不求庵に移る。三〇歳の時、良寛(七〇歳)と出会い数々の唱和の歌を残す。良寛没後、三八歳の時に「蓮の露」を残し、後、自家集「もしほぐさ」を残す。

【参考文献】良寛事典・貞心尼とその周辺



竹内 鬼外(たけうち きがい)

江戸の生まれ。明治三年(一八九〇)、八二歳で没。通称は惣太夫、号は鬼外・蓬来庵。桑名松平家の家臣で、弘化四年柏崎陣屋詰めとなり、御馬廻りを勤めた。若い頃から俳諧の他雅楽、横笛から火術、水術まで巧みだった。当時、漢文学に押されていた柏崎の俳壇は鬼外来柏により隆盛を取り戻す。主なる人の中には篠田宗吉(大宇)もいた。妻を浄願寺から迎え、六人の子有り。墓は浄願寺にある。

【参考文献】柏崎のいしづみ、柏崎を中心とする俳句の歴史

